

『日の名残り』における語りの技法 ——カズオ・イシグロ小論（1）

Narrative Techniques in *The Remains of the Day*:
A Note on Kazuo Ishiguro (1)

安藤和弘

要 旨

本稿の主たる関心は、『日の名残り』においてカズオ・イシグロが読者の読みかたを操作するために駆使しているいくつかの語りの技法を考察することにある。それに類した考察を行っている研究には、主人公かつ語り手であるステーブンスが、心的抑圧のために真実を語ることができず、真実を隠蔽するためにみづからの語りに技法を凝らしていると前提を立てた上で、心理的な角度から分析を行っているものが多い。語りに凝らされている様々な技法を考察するという点では本稿も同じだが、ステーブンスの心理が物語に反映されているという視点は、本稿では採用しない。本稿では、ステーブンスという人物とその心理をさぐるのではなく、彼が構成する物語のテキストそのものの組み立てられかた、特に読者の読みを操作する装置がどのような効果を生んでいるかを考察する。およそ作品の前半に相当する「プロローグ」から「二日目一朝」までを考察の対象とし、それ以後の章の考察は別稿において行う。

キーワード

語りの技法

この作品はイシグロの他の長篇作品と同様に、一人称で主人公が物語をすべて取りまとめるという体裁をとっている。その別段珍しいとは言えない設定をイシグロは十二分に活用し、それが可能にする文学のありかたを執拗に模索する作家である。イシグロがこれまでに発表した長篇作品は、

例外なく、一人称の語り手が物語をすべてするかたちになっている。なぜその選択肢をイシグロは常に採ってきたのかと言えば、物語を構成する上で、語られる内容と同じほどに、あるいはそれ以上に、語り手の語りかたとそこに施されている技法の探求に関心があったからであろう。このことは彼の他の作品のすべてについても大なり小なり言えることだが、作品の内容（物語展開やテーマの探求など）の解釈を大きく左右するほどに、内容そのものよりも、内容の提示のされかた、つまり語られかたに技巧を凝らすことが、イシグロにとっては重要なのである。作品世界の中で起こる出来事や物語展開は、技巧が凝らされた語りによって相対化され、あくまでも語りの関数として読まれなければならない。作品世界と語りのバランスが、そうであれば、当然のことながら問題となる。そのバランスのありかたを、イシグロは、語りに巧妙な技巧を施すことで模索する。そのような意味で、大胆な実験をイシグロはこれまでの作品で試みてきた。

そのような実験は、リアリズム小説のように見えながら、要所で語りの整合性が乱れているためにリアリズム小説として読むことには無理がある。長篇デビュー作の『遠い山なみの光』（1982年）において既に開始されていた。第二作目の『浮世の画家』（1986年）とそれに続く『日の名残り』（1989年）¹⁾も、特にその後の作品群と比較するならばリアリズム色が濃いとは言えるが、語りに緻密な工夫が施されており、そのために作品の解釈に揺らぎが生じるように仕掛けられている。長編第四作目の『充たされざる者』（1995年）はイシグロが狭義のリアリズムとの訣別を宣言した作品であり、不条理に錯綜する物語展開は背景に退き、一人称の語り手の語りとその特異性が前景化する。次作の『わたしたちが孤児だったころ』（2000年）ではプロット展開の整合性はある程度回復されるものの、語り手の語りの特異性が強力な上塗りとして依然としてある。読者にはその全体像を知る由もない仮想の世界から遠く響いてくる独白の声が物語すべてを構成

する『わたしを離さないで』（2005年）において、作品世界と語りのあいだのバランスは絶妙なものとなるが、それは多分にイシグロが仕組んだ語りの技巧の成果であった。SF仕立てであり語り口の特異性をそれまで以上に前景化した長篇最新作『忘れられた巨人』（2015年）においても、イシグロの語りの技法へのこだわりは衰えていない。

これまでの作品における語りの技巧へのイシグロのこだわりについて手短かに解説をしたが、本論で取り上げる作品は、映画化もされ、おそらくイシグロの作品群の中で最も良く知られている『日の名残り』である。語りに凝らす技巧という観点からすると実験性には一見したところ乏しく、リアリズム寄りの作品として読まれることが多い『日の名残り』においても、イシグロの主たる関心は、実は物語展開やテーマ探求などではなく、語りの技法の探求にあるのではないかという仮説を立てて、本論ではこの作品を再検証してみたい。本論の主眼は、ゆえに、主人公かつ語り手であるステーブンスの語りの特徴を分析すること、ステーブンスの語りにイシグロが施しているいくつかの技法と、それらがどのような効果を生んでいるかを考察することにある。それは、しかし、局所的な考察には終わらず、作品全体の解釈のしかたにまで大局的に影響を及ぼすことになるであろう。本論では作品のほぼ前半に相当する「プロローグ」から「二日目一朝」を取り上げ、それ以後の章の考察は続編の論考で行う予定である。

ステーブンスがする物語には、以後のイシグロのより実験性が高い作品において見られるような、プロット展開の不可解な捻じれや登場人物の奇怪な言動はなく、総じてまずはリアリズムの枠内に収まる作品で『日の名残り』はあると言える。舞台と時代の設定は1956年のイングランドであり、語り手かつ主人公のステーブンスは、現在ではアメリカ人の富豪に買い取られているが、かつては英国の貴族の館であったダーリントン・ホールで若い頃からずっと執事を務めてきており、第二次世界大戦を経て

時代が変わった現在も同じ職に就いている。最近の日々の出来事の順を追っての回想がプロット展開の基軸であるが、その回想の分量をはるかに上回る戦間期の回想談が彼の物語の大部分を構成している。その昔の出来事があるその延長線上で最近の出来事が起こったという具合に、昔の回想と最近の回想はスムーズにつながっている。平たく言えば、そろそろ老境に差し掛かるかという年齢の男の人生談の体裁になっている。

もう少し細かく整理をしておくと、一人称の語り手が好き放題に語る体裁であるので、語り手の心理を描き出す心理ドラマとして、まずは読むことができる。執事としての誇りからスティーブンスは、執事という職業について自分が思うところを延々と語るが、そのような箇所などは彼の心理ドラマの一部である。スティーブンスは自分の感情を言葉の上では表にあまり出さないで、彼の心理の読み解きは容易ではないかもしれないが、『日の名残り』は、また、もちろん、恋愛小説でもある。更に、舞台と登場人物の設定のために、二つの大戦のあいだの時期の英国の政治状況を描いた歴史小説として読むこともできるであろう。特に大恐慌以後のナチス・ドイツの台頭を受けて英国で一部の有力者たちが新ドイツ的な振る舞いをした様子が描き込まれているあたり、あるいは当時のヨーロッパの貴族的な政治のありかたと合衆国のより現代的な政治のありかたの対比が描かれているあたりなど、そのような角度から興味深く読むことができる。更にそのような読みかたの延長線上で、第二次大戦後、平和は回復したものの、急速に合衆国的な価値観が英国社会に浸透して行った様子が描かれているあたりに特に関心を抱く読者もいることであろう²⁾。イシグロが日系であることに着目して、スティーブンスの職業倫理意識に日本的なものを読み込もうとする読者もいる。これらの顔に加えてまた、特に英国人読者にとっては、英国の古き良き時代を懐かしむノスタルジアを掻き立てる要素も多分にこの作品にはある。(1993年に公開された所謂‘Merchant Ivory’も

の翻案映画は、この作品のその側面を活用したものであった。）

『日の名残り』は、そうした複数の顔を持つ多面的な作品である。見かた次第では、分解してしまってもおかしくないほどに多面的だとも言える。しかし、この作品のテキストは見事な統一体として構成されている。それには理由がある。物語構成の主導原理が圧倒的に語りかたにある——それが理由である。スティーブンスの滑らかな語り口が、一見相互には関係がない話題を隙間なくつなぎ合わせ、良くまとまった物語を構成しているのである。端麗にまとまった作品に仕上がっているという印象をこの作品が与える最たる理由は、語られる物語の内容ではなく、スティーブンスの語りかた、物語の構成のしかたのほうにある。

これから検証をしていくことになるスティーブンスの語りだが、実は読者を騙そうとするいくつかの装置が仕掛けられている。その騙しとは、総じて、彼がする物語は端麗にまとまっているという印象を受けるように仕向ける性質のものである。スティーブンス（あるいはイシグロ）に騙されてこの作品の完成度の高さを評価するのは、不当な評価のしかたではない。完成度の高さはブッカー賞受賞に実質的に値するほどのものであろう。しかし、技術的に考えると、『日の名残り』の見たところの完成度の高さは、語り手スティーブンスの語りの特性に大きく依存しているのである³⁾。では、その特性とはどのようなものなのだろうか。特定の効果を狙った語りの技法がいくつか、スティーブンスの語りの中で、見事に駆使されているのである。どのような技法が活用されているのかをさぐっていくことで、顕在化はしないように工夫されたほつれや捻じれや無理な接合が、これから検証することになるが、見えてくる。それはある種の幻滅を生むかもしれないが、語りの技法にこだわるイシグロ作品の真価を捉えようとするのであれば、なされなければならない作業である。その結果見えてくるスティーブンスの語りの実相、そこで駆使されている巧妙な語りの技法の具

体的なありかたを見て取って初めて、この作品を、そして語りの技法にこだわる作家イシグロの文学のありかたを、より深く鑑賞することができるはずだからである。

『日の名残り』はいくつかの顔を持つ多面的な作品であり、見事な統一体が構成されていると上に書いた。しかし、スティーブンスの物語にはどこかしら不自然なところがあるという感触はないだろうか。実は至るところでそう感じられてもおかしくないのだが、おそらく、そう勘繰ったときに最初に気になるのは、彼が執事という職業の意義や紳士の定義にやたらとこだわることではないだろうか。そうした事柄についてスティーブンスが語る時、過剰、あるいはくどいという印象はないだろうか。スティーブンスは自分の職業に尋常ではない誇りを抱いており、ミス・ケントンが求愛をしてくると、仕事と恋愛を掛け合わせるができず、二つの案件のあいだで引き裂かれてしまい、結局は十分に考え抜くことができないまま、結婚をするチャンスを不器用に失ってしまう。それは、しかしながら、自分の職業に理想主義的なまでの誇りを抱いていたために致しかたなかったのだと、スティーブンスは読者に思わせようとする。そのために彼は、どれほど自分は執事という職業に思い入れがあるのかを読者に伝えなければならない。そう考えて、スティーブンスは延々と執事や紳士について語るのだろうか。そもそもそういう話題を持ち出す動機という観点からは、そうではないとは言えないであろう。しかし、なぜ、多くの読者が関心を示すとは思えないような細部にまで立ち入って、かつ、あとで見ることになるが、堂々巡りになってしまうほどにまでくどくその話題を、複数箇所まで延々と続けるのだろうか。自分のこれまでの人生を美化して、美しい物語をしようという動機がスティーブンスには確かにある。自分は執事として完成体を目指し、それと恋愛とのあいだで選択を迫られたが、仕事のほうを選択し、その判断は最終的には間違ったものではなく、物語

の最後では、過去を振り返るのではなく前向きにこれからは生きていかなければならないと言って、人生談を小奇麗にまとめ上げているかに見える。しかし、それは彼が読者に持たせようとしている錯覚である可能性はないだろうか。執事や紳士という話題でスティーブンスの語りが、言うなれば歯止めが利かなくなるときの、何かが過剰であり、それが溢れ出してはいないだろうか。

その過剰分は、スティーブンスの語りが孕んでいるある歪みの徴候ではないかという仮説を立てて、本論ではその歪みとはどのようなものであるかを読み解いていきたい。「プロローグ」において既に実は十分な手掛かりが与えられている。スティーブンスは、現在のダーリントン・ホールの主であるアメリカ人富豪のファラディ氏から、南西イングランドを数日間旅する機会を与えられる。執事として館を切り盛りする上で、使用人の編成が原因で最近スティーブンスは少々困っており、かつて女中頭を務めていたミス・ケントンに復職の可能性を打診するための旅行をするのだとスティーブンスは言う。実際、ミス・ケントンから最近彼は手紙を受け取っており、スティーブンスによれば、彼女が復職してくれる可能性は実質的にある。ファラディ氏は館にこもるようにして働くスティーブンスに、気軽に息抜きをしてくれば良いという気持ちから、自分の車を貸してやるので、休暇を楽しんでこいと言っているのだが、スティーブンスは、ありがたく雇い主の申し出を受け入れながらも、そのような旅行をする以上、職務上の立派な理由がなければならぬと、読者にくどいほどに言い立てる。ファラディ氏は館の使用人の現状に問題があるなどとはまったく言っていない。スティーブンスに、ただ数日間休暇で旅行をしたらどうかと言っているだけである。にもかかわらず、スティーブンスは、自分の執事としての仕事のために出かけるのだと執拗に、過剰なまでに言い続ける。なぜなのか。

その理由は「プロローグ」を読むだけではにはわかには見えてこないかもしれないが、先を読むにつれて徐々に明かされていくことになる。「プロローグ」をまず読んだ時点でヒントになるのは、仕事をして来いと言われていたわけでもないにもかかわらず、やたらと仕事にこだわるスティーブンスのそのこだわりである。小旅行にスティーブンスが乗り気であるのは、実は仕事とは関係がない個人的な理由によるのだが、そうだと彼は読者に感づかれたくない。あるいは自分じしんに対してもそうだと認めたくないのかもしれない。勢い、彼は躍起になって仕事の話をしてしまい、不要に仕事にこだわっているという印象を与えてしまうのである。その個人的な理由とは、言うまでもなくミス・ケントンと関係がある何かである。自分が小旅行に乗り気になった経緯を説明しているくだりで、最近ミス・ケントンから受け取った手紙に触れた途端にスティーブンスは、旅行の目的は仕事なのだと強調する。

ところが、それから数日の間に、ファラデイ様のお申し出に対する私の気持ちは一変し、頭の中では、西部地方への旅という考えがしだいに大きくふくらみはじめたのです。この急変の原因が——隠しても仕方ありますまい——ミス・ケントンからの手紙にあることは——クリスマス・カードを除けば、この七年間で初めての手紙にあることは——事実です。ただ、誤解なきように願いたいのは、私はミス・ケントンの手紙で職業意識を刺激された、ということなのです。手紙を読みながら、ダーリントン・ホールの管理についていろいろなことを考えました。そして、ファラデイ様の親切なお申し出を新たに考えなおす気になったのも、この職業上の観点からなのです。(11-12頁)⁴⁾

「誤解なきように願いたいのは」に対応する原文は 'But let me make it

immediately clear what I mean by this' であり、もっと直訳に近づけると「しかし直ちに、それはどういうことかをはっきりと言わせていただきたい」とも訳せる。慌てて但し書きをつけるような口調なのである。同じ息で、「ファラデイ様の親切なお申し出を新たに考えなおす気になったのも、この職業上の観点からなのです」と、旅行をする気になった理由は仕事なのだと言っている。ミス・ケントンの手紙が刺激をしたのは、ステーブンスの「職業意識」などではなく、何か別のものであることを、行間に読み取ることができよう。

「プロローグ」を読んで、ステーブンスは何かしら煮え切らず、本当のところは何を言いたいのだから良く分からない人物だという印象を受けないだろうか。受けるとするならば、理由の一つとして、ステーブンスが言うことには矛盾があることを挙げることができる。例えば、冒頭近くの以下のくだりに矛盾があることに気がつくだろうか。ファラデイ氏から小旅行の提案を受けたとき、ステーブンスは自分はこう反応したと言っている。

青天の霹靂とでも申しましょうか。突然のことで、どうお答えしてよいものか分からず、ご配慮に感謝したのは覚えておりますが、おそらく、行くとも行かないとも煮えきらない態度だったのだと存じます。ファラデイ様は、つぎにこう言われました。（10頁）

しかしステーブンスはその直後、イングランドの美しい風景を見にどうしても出かけるのかとファラデイ氏に訊かれると、こういうことを言っている。「ファラデイ様がそのような疑問を口にされたのは、これが初めてではありません。常々、不思議に思っておられたことのように」（10頁）。ファラデイ氏がそれまでに何度もステーブンスが屋敷にこもり

がちであることを心配し、そのことを何度もスティーブンスに言っていたのであれば、また同じことを言われたこのとき、それがどうしてスティーブンスにとって「青天の霹靂」だったのか。スティーブンスの語り口は滑らかで、読者は彼が言うことをあまり疑問に思わず流して読み進めてしまうものだが、例えばここにあるような矛盾に気がつけば、この饒舌な語り手に騙されない読みかたができるようになる。

ではなぜ、スティーブンスは読者を騙すような語りかたをここでしているのか。実は、ファラディ氏からの小旅行の提案は、スティーブンスにとっては「青天の霹靂」であったどころか、心待ちにしていたものであった。スティーブンスがミス・ケントンから手紙を受け取ったのはこの場面の日の少し前のことで、彼女と再会したいという個人的な願望がスティーブンスの心に芽生え、以前からたびたびファラディ氏がしてくれていた提案には、今回に限ってスティーブンスは二つ返事でありがたく応じたかった。スティーブンスはミス・ケントンに会うために旅行をしたかった。しかし、自分は立派な執事であるという誇りから、女性に会うために旅行をしたいのだとスティーブンスは言うことができない。なので、読者を騙そうとする。だが、実はファラディ氏には本当の動機をすぐに見抜かれてしまう。先ほどの場面の日から数日後、スティーブンスはファラディ氏に、申し出を受け入れたい旨を思い切って伝える。申し出を受け入れる理由をどう説明したら良いのか、スティーブンスは相当に戸惑っていたようで、読者に対しては饒舌だが、ファラディ氏に対してはしどろもどろな話しかできなかったと思われる。スティーブンスの話をおそらく黙って聞いていたファラディ氏は、ミス・ケントンの名前をスティーブンスが出すと、ようやく口を開く。

おそらく、何かを言いかけて突然口をつぐみ、そのまま、ばつが悪そ

うに立ちつくしたのだと思います。ファラディ様がこの好機を見逃されるはずがありません。にやりと笑うと、わざと重々しい口調でこう言われました。

「おいおい、スティーブンス。ガールフレンドに会いにいきたい？ その年でかい？」（24頁）

このくだりの手前で10頁以上にもわたってスティーブンスは、延々と、館の用人不足が原因で生じる問題をどう解決したら良いかだとか、館の用人たちについての当初のファラディ氏の要望であるだとか、その要望に沿って頑張ってみたが上手く行かなかっただとか、執事として情けないことに妙案があるのに思いつかなかっただとか、小旅行に出かけるとしたら服装はどういうものにすべきかだとか、あれこれの話題を持ち出している。執拗なまでの脱線の連続とさえその間の話題の蛇行は呼んで良いほどのものである。読者はスティーブンスがいったい何の話をしているのだから分からなくなってもおかしくないほどなのだが、何のことはなく、その間にスティーブンスの頭には、実はミス・ケントンのことしかない。未決の案件（この場合にはスティーブンスの小旅行の目的）を放置したまま話題を切り替えて語りを進めていくのは、これから見ていくことになるが、スティーブンスが読者を煙に巻く常套手段である。「プロローグ」のほぼ全部をつうじて、読者にどのような話題で語りかけようが、終始スティーブンスの頭にはミス・ケントンのことしか実はないのである。そもそもミス・ケントンから手紙が来なかったならば、スティーブンスは物語を始めることをしなかったことであろう。それほどまでにその手紙とミス・ケントンは、物語の冒頭からスティーブンスにとってはあまりに重要な案件なのである。しかし、読者には彼はそのように思われたくないので、話題を蛇行させて騙しにかかるわけだが、物語中でファラディ氏を騙すことには

失敗している。読者を騙すことは可能かもしれないが、生身の話し相手のファラディ氏にはいともたやすく自分の本心を見抜かれてしまっている。ステーブンスがファラディ氏に何を言ったのか詳細は不明だが、ステーブンスの話しかたなり態度なりを観察していて、ファラディ氏にはピンときたのであろう。ステーブンスの頭にあるのは、館の使用人の充実であるだとか仕事にかかわる案件ではなく、まずはミス・ケントンなのであろうと。

話題の横滑りのような切り替え、ときには脱線と言えるほどの転換を、作品全体をつうじてステーブンスはしている。それはステーブンス（あるいはイングロ）が駆使する語りの技法の一つである。それは、ステーブンスの頭にある案件から読者の注意を逸らす効果を狙って使われる。「プロローグ」において、更にもう一つステーブンスが使っている語りの技法がある。ファラディ氏がステーブンスに小旅行の提案をする既に見ておいた場面に戻る。「だいたいだね、年中こういう大きな家に閉じ籠って、ひとに仕えてばかりで、君らはせっかくのこの美しい国をいつ見て歩くんない、自分の国なのにさ？」（10頁）という趣旨のことをファラディ氏はこれまでもステーブンスに何度も言っていたのに、今回また同じことを言われてそれが「青天の霹靂」（10頁）であったとステーブンスが言うのは矛盾していると、既に指摘したが、今度はそのすぐ後の「突然のことで、どうお答えしてよいものか分からず」（10頁）という一言を取り上げる。ここでは完全に答えに窮したと言っているわけだが、その直後にステーブンスはそれを覆すことを言っている。「脚立の上で同じ質問を投げかけられたこのとき、じつは、私の心には一つの答えらしきものが浮かんでおりました」（10頁）。原文は‘On this occasion, in fact, a reply of sorts did occur to me as I stood up there on the ladder ...’である。まずはこの二つの文章は相矛盾していることを確認した上で、二つ目の文章の言い

回しなのだが、‘in fact’（「実は」）と言ったり、強調の‘did’を使ったりしているあたりに、言い訳口調を聞き取ることはできないか。整理をすると、あることをまず言うておいて、実のところそうではなかったとステイブンスは言い直しをしている。前言撤回、あるいは前言への後からの留保づけと呼んでも良い。一見些末と言えば些末な事柄なのだが、イシグロ作品の語り手たちはやたらとそれをやるのである。しかも、読者に特定の読みかたをさせようとして、それをやる。この作品のステイブンスはその典型例と言って良い。個々の矛盾は大きなものでないが、同様の言い回しが反復されると、読者は慣れが生じて読み流すようになり、狙われている効果は増幅していく。相矛盾したことが述べられているのに、どちらが本当なのか判然としないまま、読者は矛盾をあまり気にせず先へ読み進めることを促される。しばらくするとそのような案件があったことじたいを読者は忘れてしまう。未決のまま、曖昧なままで放置されたので、忘れてしまいがちなのである。狙われている効果とはまさにそれである。未決の案件があったことを読者に忘れさせること。

別の例を「プロローグ」から拾っておこう。ファラディ氏から小旅行の提案を受けて、数日経ってようやくステイブンスは回答している。そのあいだ、ステイブンスはファラディ氏が提案について気持ちが変わってしまうのではないかと気が気でならないのだが、自分の気持ちを落ち着かせようとするかのように、まずはこう言う。

もちろん、二週間前のご発言がその場の思いつきにすぎず、いまでは考えが変わっておられる可能性もあるわけですが、過去何カ月かの私の観察によれば、召使泣かせの最たるもの、あの「気まぐれ」という悪癖は、ファラディ様にはありません。（22頁）

読者は、ファラディ氏は気まぐれな人物ではないという印象を受けるかもしれない。しかし、ステーブンスはファラディ氏の心変わりを中心に心配しているのだから、同じ話題を蒸し返さずにはいられず、すぐ後でこう言う。「私は、ファラディ様が気まぐれだとは一瞬たりとも思ったことはありません。しかし、何かに没頭したり気が散ったりしておられるときにこのような話題を持ち出すのは、やはり適当ではありませんまい」(22頁)。遠回しな言いかたになっているが、ファラディ氏は気まぐれになりえもすると読めるであろう。本当にファラディ氏は気まぐれな人物でないならば、「何かに没頭したり気が散ったりしておられる」ときに話題を切り出しても、そのときの気分で言うことを変えはしないはず。どちらの箇所でもステーブンスはファラディ氏は気まぐれな人物ではないと断言しているが、同時に、気まぐれな人物で実はあるという解釈も許すようなことも言い添えている点に注意したい。ファラディ氏は気まぐれになることもあって、小旅行の件で心変わりをする可能性もあるとステーブンスは思っているからこそ、ファラディ氏は気まぐれではないとくどいほどに言い立てているのである。結局、ファラディ氏はどれくらい気まぐれ、あるいは気まぐれでないのか分からないまま、読者は先へ読み進めることになる。

更にもう一つ、イシグロがしばしば使う語りの技法を、ステーブンスが「プロローグ」で既に使っているのだから、見ておこう。ファラディ氏が「ガールフレンドに会いにいきたい？」(24頁)と言って、ステーブンスの旅行の目的を見抜いているくだりをもう一度見てみる。ステーブンスは物語の地の文の自分の言葉では旅行の目的は仕事だと嘘をつきとおそうとするのだが、ここではファラディ氏の言葉が直接話法でステーブンスの物語中で引用されていて、その直接話法の言葉のほうが真実を語っている。ここでは、ステーブンス以外の登場人物が直接話法で言うことが、ステーブンスが語りの地の文で言うこととはずれている、あるいは矛盾

しており、スティーブンス以外の登場人物が言うことのほうが真相を語るということが起こっている。もちろん、ファラディ氏の直接話法の台詞もスティーブンスの物語の一部なのだが、スティーブンスが自分以外の登場人物が言ったことを直接話法で引用するときには、そうすることで何らかの効果が狙われているように思われる。そういう矛盾、ずれの個々の例は、個別には些末に見えるかもしれないが、イシグロ作品においては一定の頻度で見られるのであり、何らかの効果を狙った語りの技法と目すべきなのである。その効果とはどのようなものであろうか。

スティーブンスが物語の地の文で、延々と小旅行の目的を自分の職務に引っ掛けて説明し続けてきた後で、ファラディ氏がそれぞれ「青天の霹靂」でことの真相を言う。では、読者はここで、スティーブンスの旅行の目的は「ガールフレンド」に会いに行くことだと確信するだろうか。しないであろう。ファラディ氏の実は真実を衝いている言葉は適当に読み流してしまうことであろう。実はファラディ氏の台詞には大事な情報が埋め込まれているにもかかわらず、こういう大事な箇所を読者はつい読み流してしまう。それには二つの理由があるように思われる。まずは、スティーブンスは自分以外の登場人物が言うことをあまり直接話法で伝えてくれないという事情がある。作品全体を眺めてみると、直接話法で会話が行われる箇所は決して多くはない。人と人とのあいだでやり取りがあっても、スティーブンスはその概要を自分の言葉に適当に変換して知らん顔で自分の語りの地の文で説明してしまうので、たまに直接話法で会話が出て来ても、読者は、そこにある「他者の声」が言うことは参考程度にしか考えず、それをどう解釈すべきかについては、仔細に人々の発言や会話の場面に説明を加えるスティーブンスによる説明を待つてしまうのである。

二つ目の理由は、読者の注意を惹きつける力を持っているスティーブンスの能弁な語りは、場面や話題ごとには詳細にわたり他の登場人物たち

が言ったことについて説得力がある説明をしてくれているように見えるが、そうして自分に都合が悪くなると、話題を急に逸らしてしまう癖がスティーブンスにはあることと関係がある。既に見ておいた「脱線」を彼の語りはしているように、そのようなときには見えるかもしれない。旅行に是非行かせてもらいたいと急に言い出した本当の理由をファラデイ氏にあっさりで見抜かれてしまうと、スティーブンスは、ファラデイ氏がミス・ケントンをスティーブンスの「ガールフレンド」だというのは「アメリカ的ジョーク」(25頁)なのだろうとまずはごまかし、続けて「アメリカ的ジョーク」がどうのこうのという、ミス・ケントンとは何らの関係もない話題を立ち上げて、読者の注意を逸らしにかかる。気の利いたジョークを言うことができるのは最近では執事の職務の一つになったのかなどと、その話題を十八番の執事の話題に引っ掛けたりもした挙句、「つい話題がそれました」(32頁)などおしまいにはと白々と言っている。ミス・ケントンとも小旅行とも関係がないその話題でスティーブンスの語りは延々と数ページも続く(およそ25-32頁)。関係がないことをそれだけ延々と語られると、読者はその手前、「脱線」が始まる前の箇所では何が述べられていたのかを忘れてしまう。逸らす先の話題がまたそれなりに興味深いものであったりもするので、読者は話題を逸らされたことじたいをあまり気にすることなく読み進め、そうしてスティーブンスに騙されてしまう。それは語りの地の文が続く箇所でもスティーブンスはしばしばやることだが、「他者の声」が真実を語った直後になされると、読者を騙す効果は更に大きくなる。真実はスティーブンスの饒舌によって見事に掻き消されてしまうのである。自分に都合が良いように物語を組み立てていくスティーブンスの語りの表層の背後に言わば回って真実を見て取ろうとするならば、それゆえ、スティーブンス以外の登場人物たちが直接話法で語る部分は特に注意を払って読まなければならない。そのような意識を持って読ま

なければ、地の文では真実を歪めて伝えているかもしれないステイブンスに騙されてしまいかねない。脱線をステイブンスは「プロローグ」のおしまい近くまで続け、「プロローグ」は、結局、ミス・ケントンはステイブンスにとってどういう存在なのか、ステイブンスの小旅行の動機には個人的なものがあるのかどうか、分からないまま、曖昧なまま終わっている。

では、ステイブンスはなぜ、「他者の声」に真実を埋め込んで、読者に真実が漏れてしまいかねないように物語をわざわざ組み立てるのか。「他者の声」の重要性に読者が気がつかなければ、より効果的に読者を煙に巻くことができるからである。ところどころに真実を埋め込んでも、そこに真実があることに読者が気がつかなければ、より多様な情報が盛り込まれている中、読者は定まった解釈を施すことがより困難になる。しかし、そのようにして読者を多重に煙に巻くためには、ステイブンスは自分の地の文に説得力を持たせて、読者の注意を自分が直に語る物語に十分に惹きつけて、自分に都合が悪い真実からは読者の注意を逸らさなければならない。であればこそ、ステイブンスは、自分の語り口において読者の読みを操作するような装置を活用するのである。そうしながら、ステイブンスは、自分が語ることはすべてが自分の都合に合わせて歪められているわけではなく、真実もどこかに埋め込まれているはずだという印象を読者に与えなければならない。しかし、どこに真実があるのか、あるいは隠されているのかと言っても良いが、それは読者に気づかせてはならない。

「プロローグ」に始まり物語の最後まで、最近ステイブンスがミス・ケントンから受け取ったという手紙が重要な道具として使われている。既に見たとおり、その手紙がもしも届かなかったならば、ステイブンスは『日の名残り』という物語をそもそも書かなかったであろうほどに重要な代物でそれはある。ステイブンスが物語をする気になったきっかけと呼

んでも差し支えあるまい。スティーブンスはその内容がどのようなものであったのかをまるで出し惜しみするように、物語全体をつうじて読者に徐々に明かしていく。「プロローグ」を読んだかぎりでは、どういう内容であったと読者は思うだろうか。スティーブンスの言い分としては、まず、ミス・ケントンはかつて有能な女中頭としてダーリントン・ホールで勤めていたことがあり、彼女が復職してくれるならば、最近スティーブンスを悩ませている館の使用人編成の問題は解決する。しかし、ミス・ケントンは手紙で復職の意思があると言っているのだろうか。スティーブンスの能弁に乗せられて読んでしまうと、彼女にはそういう意思があると読者は思うかもしれない。スティーブンスはこのような言いかたをする。

ミス・ケントンの手紙を読み、その長い、抑えた調子の文章の合間に、間違いなくダーリントン・ホールへに郷愁がにじみ、もどりたいという願望——だと私は確信しております——が込められているのを感じなかつたら、私は計画を見直さなかつたかもしれません。(18頁)

そのすぐ直後で、今度は「確信」しているとまでは言っていないが、やはりミス・ケントンには復職したい願望があると読めることをまた言っている。

西部地方に旅行して、途中、ミス・ケントンのもとに立ち寄れば、ダーリントン・ホールにもどりたいという願いがどの程度のものか、私から直接確かめることができます。もっとも、手紙を何度読み返してみても、私には、ミス・ケントンの願いが私の空想の産物だとはとても思えないのですが……。 (19頁)

しかし、スティーブンスは予断はできないという趣旨のことをこっそりと言っているくだりがある。「ミス・ケントンがほんとうにお屋敷にもどりがっているのかどうか、私は確実なことを何も知りません」（24頁）。この一言が実は真相を最も正しく伝えているのだが、既に指摘をしておいた前言撤回、あるいは前言への後からの留保づけの技法をスティーブンスは使っているため、読者は煙に巻かれてしまう。最初の二つの引用箇所にあるのは、ミス・ケントンの願望ではなくて、実はスティーブンスじしんの願望である。しかし、スティーブンスの語り口は、ミス・ケントンに願望があると読むようにと読者を誘うように工夫されている。

一つ目の引用箇所は特に工夫が凝らされている。日本語訳では曖昧になっ
てしまっているので原文を参照したい。「抑えた調子の」となっている原文の単語は‘unrevealing’であり、「多くを語ってくれない」という意味である。「願望……が込められている」に対応する原文での表現は‘distinct hints of her desire’であり、直訳すれば「願望の明らかな仄めかし」といったところである。多くのことを明かしてくれない文章に「見間違えな」いものを見て取ったとスティーブンスは言っているわけだが、そこには捻じれがないだろうか。何か明らかであるならばそれは仄めかしとは呼べないのではないか。スティーブンスの表現は矛盾しているのではなからうか。そこには矛盾があることを、しかし、読者に気づかれないように、スティーブンスは言葉を上手く操っている。狙われている効果は、結局は、ミス・ケントンに復職の願望があるのかどうかは良くは分からず、分からないままにその案件はしておいたまま、読者にそのことはあまり気にせず
に読み進めることを促すことである。

スティーブンスは旅に出る。一日分の旅を終えてソールズベリーの宿でその日の出来事を振り返る「一日目一夜」だが、プロット展開は乏しく、田園風景がいかにもすばらしいかという話題と、執事の仕事とはどうい

のなのかという話題についてスティーブンスは延々と語る。ミス・ケントンとの再会の可能性が開かれたからこそスティーブンスは旅に出ることにした。なのに、ミス・ケントンをスティーブンスは話題にしない。執事としての責任感から館を滅多に離れることはなかったスティーブンスであるので、解放感に浸りながら田園風景に見とれ、職場から離れて、田園風景のすばらしさに劣らない自分の職業のすばらしさに改めて誇りを抱き直しているのであろうとまずは読めるのだが、ミス・ケントンの話題は積極的に避けていると読むこともできる。「プロローグ」とのつながりかたなのだが、ミス・ケントンが「プロローグ」では最大の案件であったのに、「一日目」では話題が不自然なほどに変わる。「一日目」を読むと、読者はミス・ケントンのことを忘れ始めてしまうかもしれない。そうなるようにと、実は、スティーブンスは話題の逸らしを巧妙にしているのである。

どのように話題を逸らし、逸らしながらどのような語りの技法が凝らされているのかを見てみよう。スティーブンスは物語全体をとおして自分は執事としていつもダーリントン・ホールにこもるようにして勤めていたという印象を読者に与える。執事という自分の職業への思い入れがスティーブンスには非常に強くあり、そのため物語中で折に触れてそれを話題にするし、また、今回の旅先での出来事について語る部分以外はすべて館の中での出来事の回想になっているという、物語の構成のためでもあろう。スティーブンスは雇い主について出かけるとき以外はいつも館にいたのであろうか。案件としては些末かもしれないが、スティーブンスの語り口を読み解く参考になる箇所があるので、見ておこう。田園風景が見慣れたもののように見えることにスティーブンスは首をかしげている。

おそらく、お屋敷からどんどん遠ざかっているのに、周囲には相変わらず、多少なりとも見覚えのある風景が続いていたからなのでしょう。

う。いつもお屋敷内部の仕事に拘束され、外へなど出たこともないよ
うに感じておりましたが、やはり長い間には、あれこれの用事でけっ
こう外出し、自分で思う以上にお屋敷周辺の地理をよく知っていたも
のとみえます。（34頁）

どこかすっとほけた口調を聞き取ることができる。けっこうな年齢にス
ティーブンスはなっているので、記憶が曖昧になっていて、若かった頃の
ことまでは思い出せないのかもしれない。しかし、いつも仕事で屋敷内に
拘束されていて外出などしたことはないというのは、誇張であろう。勤勉
に勤務する執事で自分は常にあったという印象を読者に与えようとして誇
張をし、自分じしんの行動について他人事のように「よく知っていたもの
とみえます」ととほけた口調で、この案件について疑似決着をつけようと
している。

ソールズベリーの宿に到着した場面にも、ステューブンスの言葉を額面
どおりには受け取れない箇所がある。

宿の主人は見たところ四十前後の女で、なにやら私をたいそうな客と
みなしているふうですが、これはファラディ様のフォードと、私の上
等のスーツに影響されてのことに違いありません。ソールズベリー
に着いたのは、午後三時半頃でした。宿帳の住所欄に「ダーリント
ン・ホール」と記しますと、女主人は少しあわてた顔つきでこちらを
見ましたが、あれは、私をリッツやドーチェスターに泊まり慣れた紳
士だと、勝手に思い込んだための狼狽でしょう。へたな部屋に案内し
たら、憤然、宿から飛び出していくのではないかと……。 （39頁）

女主人が狼狽したのはステューブンスが乗って来た車や服装を根拠に「た

いそうな客」と思ったからだと読ませようとしているが、それが原因で狼狽したのであれば、スティーブンスの姿なり車なりを最初に見たときにすぐに狼狽するはず。スティーブンスが宿帳に書き込んだ住所にももちろん狼狽したのである。ミス・ケントンの手紙の内容を物語全体をかけて少しずつ明らかにしていくのと同じで、スティーブンスはかつての雇い主、ダーリントン卿の経歴については少しずつゆっくりとしか読者に明かしてくれない。なので、どうして宿の女主人が「ダーリントン・ホール」に狼狽したのかは、この時点では読者には分からない。しかし、スティーブンスは、ダーリントン・ホールには何か問題があるところの箇所ですでに仄めかしているのである。その仄めかしをした上で、同時に、読者がそれに気がつかないように工夫をしている。読者には事情が良く分からないことについて仄めかしだけをしておいて、それは読者の記憶には残らず、後でまた同じ案件について触れるときに読者に曖昧な既視感をおぼえさせるという技法がここでは使われている。こういう場合、狙われている効果はにわかに判然とする類のものではないかもしれない。語り手が読者の読みを操作することが目的であるとは言えるが。

このような場合、スティーブンスは嘘をついていると断じることはできるだろうか。今見たくだけりでは、スティーブンスは宿の女主人が狼狽した本当の理由を勘ぐっているはずなので、読者に対して嘘をついていると言えよう。しかし、似たような技法をスティーブンスが使っている箇所は作品中他にもあり、微妙なケースもある。スティーブンスは注意深く自分の言葉をモニターしながら物語をする語り手なので、真相と違うことを言っている場合、真相に気がつかずに勘違いで言っていることはまずない。微妙というのは、しかし、彼は真相のそれだけでは何のことやら分からないような一部だけを読者に伝え、読者の読みを浮足立たせるようなケースである。スティーブンスは「信頼できない語り手」に分類できるが、丁寧に

見ていきたいのは、より詳細になぜ信頼できないのかである。あからさまな嘘について読者を惑わすようなことは、ステーブンスはあまりしない。なので、読者の信頼を総じて勝ち得る語り手なのである。しかし、まさにその信頼を活用して読者を騙すという狡猾なことをする。総じて、ステーブンスは、「信頼できるのかできないのか分からない語り手」とだけは言える。

少々脱線になるが、ステーブンスという語り手のもうひとつの顔を見ておこう。ステーブンスはイングランドの田園風景のすばらしさを称賛しているが、彼にとってイングランドの風景についての知識は概ね書物を介して間接的に得たもの。主にダーリントン・ホールの読書室にあるジェーン・サイモンズ夫人著『イギリスの驚異』（20頁）なる書物の写真や風景スケッチに、ステーブンスの理解は依拠している⁵⁾。そうだと断りを入れた上で、しかしなお、ステーブンスは大げさなまでの称賛をする。

そうした景観に直接触れたこともないのに、こんなことを申し上げるのはおこがましいかもしれませんが、私はあえて、多少の自信をもって申し上げたいと存じます。今朝のように、イギリスの風景がその最良の装いで立ち現れてくるとき、そこには、外国の風景が——たとえ表面的にどれほどドラマチックであろうとも——決してもちえない品格がある。(41頁)

他人（この場合には「サイモンズ夫人」）の権威を借りての大言壮語である。それは、執事という職業じたいが偉大であり得るという印象も読者に与えながら、ステーブンスが執事としての自分を偉大な人間として読者にアピールするとき、実はやはり他人の権威を借りてそうしているのと類型的

だ。自分が仕えるダーリントン卿が偉大な人物であったからこそ、卿に仕えた自分も偉大なのだというのが、簡単に言えば、スティーブンスのロジックである。執事としてのスティーブンスの偉大さは、であれば、間接的に借用されたものと言わざるをえない。

イングランドの景観の「偉大さ」(41頁)という話題でスティーブンスは強弁をするが、どうしてそのような話題に入れ込むのかと言うと、実は別の話をしたいのである。「いま申し上げたようなことは、じつは、私どもの間で昔から論議されてきた一つの問題に、たいへん深い関わりがあります。それは、偉大な執事とは何か、ということです」(42頁)。その後、「一日目」のおしまいの63頁まで延々とスティーブンスは偉大な執事とは何かという話題を継続する。その間のスティーブンスの話の持って行きかたには彼の語りの特徴の一つを見て取ることができる。その問いに答えるために最も重要なのは「品格」であるとスティーブンスは言う(48頁)。(邦訳では「品格」と訳されているが、原文での単語は'dignity'であり、より精確には「威厳」の意である。)そして、「品格」の「分析」(48頁)に着手する。その「分析」の過程で、スティーブンスはやはり執事であった自分の父親を引き合いに出して来る。自分の父親は執事の「品格」の「本質」(50頁)を有していた。そのあたりでスティーブンスは執事の「《品格》の定義」(50頁)をしようとしているのだが、どう結論をするのだろうかかと期待をして読み進めても、「定義」めいたものはいずれ出て来ない。話は堂々巡りになって行く。「品格」の話から始まって、それは「本質」を備えた自分の父親のような執事のみが有するものであると展開し、ではその「本質」とは何かと言えば、それを説明しにかかるとまた「品格」に話は戻ることになり、話が堂々巡りになっていて説得力に欠けることを補うためか、具体的な人物例を今度は持ち出してくるというパターンが続く。結局、スティーブンスのこの件についての話は、「品格」の定義をしないまま曖昧に終わる。

具体的な人物例のひとつに、スティーブンスの父親がよくしていた逸話の主人公である、雇い主とともにインドに行っていた執事がいる。屋敷に虎が侵入したという有事にあつて、冷静さを欠くことなく事態に対処したという内容の逸話である。その逸話は実話であつたと父親は言っていたとスティーブンスは言う（52頁）。実話であるから説得力があるのだと言われているように読めるのだが、実話であるのかどうかはいつでも良いとスティーブンスは言う（53頁）。その後スティーブンスは、父親の身に起こつた二つの出来事を逸話として紹介する。どちらも、冷静さを保つのが困難な状況下で父親は立派に冷静さを保つたという趣旨の話なのだが、話をし終えたところでスティーブンスは、「裏付けとなる証言もあり、私は事実であつたと確信しております」（60頁）と言う。先に、語り継がれる逸話が実話かどうかはいつでも良いと言っておきながら、父親にまつわる逸話に話を進めると、実話としての信憑性を強調する。一貫性がないのである。その後、スティーブンスは執事というものは英国にしかおらず、それはイギリス人だけが感情を抑制することができるからだ、国民性の話題へと脱線する。「一日目」の最後では、やはり何か結論めいたことを言わねばならないとスティーブンスは思ったのか、偉大な執事は直感で見分けられると言う。「行き会いさえすれば、偉大な存在に出会つたことがわかるのです」（63頁）。直感で見抜けるのであれば「分析」は必要なく、実際、見たとおり、スティーブンスの説明は堂々巡りに陥つてしまつていて、「分析」にはなつていない。「品格」、「分析」、「本質」というような重たい言葉を多用して読者を説得しにかかつているのだが、丁寧に読めばスティーブンスの話には一貫性がなく、ゆえにどの言葉も曖昧に使われていることが判明するのである。

それにしても、どうしてスティーブンスは執事の話に執拗にするのだろうか。「プロローグ」と「一日目」の接続には捻じれがあることは既に見

ておいた。「プロローグ」の主たる話題はスティーブンスのミス・ケントン絡みの個人的な願望である。一日分の旅を終えて、急に関心が偉大な執事のありかたに切り替わるのはおかしいであろう。執事的话题をスティーブンスは「プロローグ」で既に立ち上げているので、表面上は接続の整合性は保たれているように見える。しかし、そう読者に読ませることはスティーブンスの策略なのである。実は「プロローグ」と「一日目」は整合性を持って接続している。しかしその整合性のありかたは執事という話題を軸とするものではない。スティーブンスが物語を始め、し続ける動機は、「プロローグ」においてミス・ケントンへの彼の個人的な関心に固定されたと考えてみる。であるとすれば、スティーブンスが「一日目」をイングランドの景観や偉大な執事とは何かという話題で押しとおすとき、彼は「話題のすり替え」をしていることになる。そうした話題で延々と語っているあいだ中ずっと、スティーブンスの頭にあるのは実はミス・ケントンなのである。そのような話題のすり替えは、スティーブンスの語りの技法の更なる一つであり、後で見ることになるが、この箇所以外でも使われている。

「二日目一朝」はミス・ケントンの手紙についての話から始まる。「プロローグ」で言っていたことと同じようなことをまずスティーブンスは言う。

たしかに、手紙のどこにも「もどりたい」の五文字は書いてありません。が、ダーリントン・ホールの日々への深い郷愁は文章の随所で感じられ、全体のニュアンスから伝わってくるメッセージは間違いがありません。(66頁)

はっきりとは書かれていないがニュアンスから確実にメッセージを読み取

ることができるというレトリックが用いられている。館に戻りたいとはどこにも書かれていないということだけが真実で、残りはすべてスティーブンスの願望に実はすぎない。スティーブンスの願望は別のかたちでも表現されている。ミス・ケントンは結婚して姓が変わっていて、正しくは「ミセス・ベン」と呼ぶべきなのだが、自分は「この二十年間、心の中ではずっとミス・ケントンと呼びつけて」（65頁）きたので、それを変えたくはないとスティーブンスは言う。未婚か既婚かにスティーブンスがこだわるのには隠された理由がある。これもまた読者にすぐには気づかれないように埋め込まれた仄めかしなのだが、スティーブンスはミス・ケントンとの結婚の可能性を実は考えている。二十年も会っていないにもかかわらず、心の中にはいつもミス・ケントンがいたと、この一言は実質上言っている。スティーブンスの心の中にはいつも恋愛、結婚の対象としてのミス・ケントンがいたのである。

スティーブンスによれば、手紙の内容から察するに、ミス・ケントンの結婚生活は破綻しかけている。「悲しいことに、その結婚生活がいま破綻しかかっていると察せられるのです」（65頁）。物語の結末近くで実際にミス・ケントンと再会して明らかになるのだが、彼女の結婚生活は破綻しかけてなどいない。スティーブンスが自分じしんの願望から勝手に察しているだけなのである。読者はスティーブンスの言い分をつい信じてしまうかもしれないが、彼は本当のところは分からないと留保もしている。「もちろん、詳しい事情は何も書いてありませんし、また、ひとに聞かせるようなことでもありますまい」（65頁）。しかし、これは巧妙な騙しの台詞で、読者は読み流してしまうことであろう。

スティーブンスはミス・ケントンの手紙の内容を読者に伝えるとき、自分じしんの願望に訴えかけてくる箇所だけを選択的に拾っていることにも注意したい。そうしておいて、自分の願望にまかせて脚色をする。

結婚がこんな破局に至るといのは、もちろん悲劇的なことです。中年も相当な年になったいま、なぜこんな孤独でわびしい思いをしなければならないのか……と、その原因となった遠い過去の選択を、この瞬間も、ミス・ケントンは後悔とともに思い返しているのではありますまいか。(66頁)

こういう言いかたをされると読者はついスティーブンスを信じてしまうであらう。また、ここでは、ミス・ケントンの結婚生活について説明しているふりをして、密かにスティーブンスは自分の願望を仄めかしていることも見て取っておきたい。「遠い過去の選択」というのは、二人がダーリントン・ホールで一緒に働いていたとき、結婚しなかったことへの言及である。先を読まなければそういう可能性があったことは分からないので、微妙な仄めかしなのだが。さて、ミス・ケントンの言葉を直に引用しなければ説得力がないので、スティーブンスは断片的に抜粋をするのだが、そのしかたは選択的である。自分の願望の後押しをしてくれるような箇所だけをおそらく引用している。

ところどころに、現在の境遇に絶望しかかっているような調子が見えて、気になります。たとえば、ある箇所に「残りの人生をどう有意義に埋めていけるのか、私には想像もつきませんが……」とあったり、また、別の箇所には「これからの人生が、私の眼前に虚無となって広がっています」とあったりします。(67頁)

直接に引用されたミス・ケントンの言葉には確かに絶望の響きがあるにはあるが、結婚生活に直にかかわる表現はない。前後でスティーブンスが彼女の結婚生活が云々と言いつ立てているために、読者は騙されて、ミス・ケ

ントンの言葉は結婚生活への言及なのであろうと読んでしまう。

スティーブンスがミス・ケントンとの結婚を考えていることは、別のかたちでも仄めかされている。ミス・ケントンはその昔、ダーリントン・ホールに、スティーブンスの父親が副執事として着任したのと同期して、女中頭として着任したのだったが、それは、それらの職位にあった男女が結婚をして館を同時に去ったからであった。その経緯を語っているくぐりで、スティーブンスはこう言う。

もちろん、二人の雇人が互いに恋に落ちて、結婚しようというのですから、どちらがどれだけ悪いなどということは考えても仕方のないことですが、私がとくに眉をひそめたくなるのは、なかに、純粹に仕事に打ち込んでおらず、いわばロマンスを求めて職場から職場へと歩き歩く人々がいることです。この点では女中頭がとくに悪質で、この手合いは私どもの職業を汚すものと言えましょう。（70頁）

ミス・ケントンもそういう部類に属さないという証拠はない。ダーリントン・ホールに着任する前は別の館で女中頭を務めていた彼女だが、どうして職場を変えることにしたのかの説明はない。そういう部類を批判することでスティーブンスは、当時、自分がミス・ケントンと結婚するなどあり得ないことであつたとまず言っている。続けて彼はこうも言っている。「急いで付け加えておきますが、私はミス・ケントンのことを言っているではありません。」（70頁）。もちろん、ミス・ケントンのことが頭にあるから出て来る一言である。職場での恋愛、結婚はいけないと表向きには言っていながら、結婚して辞めていった二人の雇人を話題にすることで、スティーブンスは、自分とミス・ケントンが当時結婚するかもしれない可能性を、そしてこれからできるかもしれないと考えていることを仄め

かしているのである。職場恋愛の話をしているようでいて、実はスティーブンスの頭にはミス・ケントンのことしかない。

副執事として館に着任した老齢の自分の父親が、東屋で客をもてなしていたダーリントン卿のもとへ茶菓子を盆に乗せて運んでいたときに転倒する失態を犯した後のこと、ある日の夕方、誇りにかけて二度と同じ過ちを犯すまいと、独りで転倒した場所で歩く練習をしている父親の姿を、ミス・ケントンが館の最上階の客室の一つの窓から見つめているのをスティーブンスが見つめて、二人でスティーブンスの父親の寂しい姿を眺めるということがあった。そのときのことにミス・ケントンは手紙の中で触れているらしい。この作品の一つの原風景としてよく取沙汰される、感動的と言えば感動的な場面なのだが、その場面について語る時、スティーブンスは読者に隠していることがある。館の最上階の客室の扉がすべて開かれて並ぶ廊下を歩いていたときに、偶然ミス・ケントンの姿を認めたときスティーブンスは言うのだが、そもそも彼は何をしに最上階へ行ったのだろうか。仕事があつて行ったとは思えない。と言うのも、スティーブンスがまさにそのことに触れていて、彼が言うことは曖昧な言い訳にしか聞こえないからである。「客室が並ぶお屋敷の最上階に私が何の用事があつて行ったのか、もう思い出せません」(93頁)。ミス・ケントンだけでなくスティーブンスの記憶にもこの日の夕方の出来事は鮮明に残っている。どういう用事があつて最上階に行ったのかは忘れてしまったというのは嘘であろう。後で見ることになるが、スティーブンスはミス・ケントンから、あなたはやたらと屋敷の中をうろろと歩き回ると言われていた。スティーブンスはおくびにも出さないが、偶然にミス・ケントンの姿を認めたのではなく、彼女の後をつけて最上階まで上がって行った可能性はないだろうか。あるいは、彼女にばったり出くわすことを期待して、彼女がいそうな場所へふらついて行ったのではないだろうか。

話題は変わり、ダーリントン卿が館で開催した秘密の国際会議をスティープンスは回想し始める。それは自分が執事として成長する大事な機会であったとスティープンスは言う。「私はあの会議を振り返るとき、あれこそ、いろいろな意味で私の執事人生の転機だったと思います。何よりも、私は執事としてあの会議で真に《成長した》と思うのです」（99頁）。確かにそれはスティープンスの執事としての才覚を試す重要な機会であったに違いない。しかし、読者にそう思わせようとしているように、本当にスティープンスは抜群の才能を発揮して、屋敷の切り盛りを見事にやってのけたのであろうか。そのあたりは実はどうも怪しい。既に指摘をしておいた「他者の声」が参考になる。国際会議のあいだ、スティープンスが無能であった可能性を示唆するようなことを、ミス・ケントンが言っているくだけりがある。きちんと仕事をしているかどうか確認するためにミス・ケントンに声をかけたスティープンスは、こう言われてしまう。

「私が一分一秒も無駄にできない忙しい思いをしているときに、あなたは、また、ずいぶんとお暇なようですわね、ミスター・スティープンス。私にももう少し暇があったら、喜んでお屋敷内をうろつき回って、この辺のどなた様かがもうすっかり手を打たれたことに、わざわざ《抜かりはないか》と尋ねて差し上げますのに、残念なことですわ」（112頁）。

続けて彼女はこうも言う。「いずれにせよ、いくら暇を持て余しているからといって、お屋敷内をほつき歩いて、他人の邪魔をしていいことにはなりませんわ」（112頁）。更に続けて、ここは重要なのだが、ミス・ケントンはこう言う。

「とにかく、私にはまだまだ仕事があります。後について回って、邪魔をしないでください。それほど暇つぶしがなかりたかったら、外に出て新鮮な空気でも吸っておられたほうが、お体のためによろしいではありません？どなたの迷惑にもなりませんし」(113頁)

ミス・ケントンは多忙で苛ついて嫌味を込めて言っている可能性はあるにしても、また、スティーブンスはミス・ケントンははっきりとものを言う人であったことを読者に伝えようとしてこういう彼女の言葉を拾っているにしても、少なくともスティーブンスは自分で言い張っているほどには多忙でなかった様子が窺える。更に、三つ目の彼女の台詞で、彼女の「後について回って」と言われており、スティーブンスはどうもミス・ケントンの近くにやたらといたかったらしい。その動機はと言えば、スティーブンスは何も言っていないが、彼女に好意を抱いていたからであろう。そうであったならば、恋愛感情がスティーブンスの勤務状況を乱していたことになる。そのようなことはスティーブンスじしんはまったく言っていないのだが。

スティーブンスが言っていることを額面どおりに受け取ることはできないもう一つの大事なくだりを見ておく。フランスからの来賓デュボンに合衆国からの来賓ルイスがやたらと接近することを、ダーリントン卿の利害に照らして問題視していたスティーブンスは、デュボンの部屋で二人が何かを話し合っているのをこっそりと盗み聞きしに行く。スティーブンスは盗み聞きをしたとは言っていない。スティーブンスの言い分はこうである。

私は何かの用事でデュボン様の部屋へ行き、ノックをしようとしたのですが、その前に、いつもの習慣でドアに耳をあて、中の様子をうか

がいました。一般の方は、こんなことはなさらないかもしれません。しかし、これは、ぐあいの悪いときにノックをしてしまう危険を避けるための、ちょっとした用心なのです。私はいつもしておりますし、同業の者の間でも普通に行われていることです。言い訳をするようですが、あの日は結果的に盗み聞きになってしまっただけのことで、私に最初からその気があったわけではありません。（134頁）

「何かの用事で」とスティーブンスは言っているが、館の最上階の客室でミス・ケントンの姿を偶然見かけた場面での言い回しと似ている。この場合も、職務上の用事などなかったはずだ。あったのであれば、ノックをせずに帰って行ったのは職務怠慢ということになる。「ちょっとした用心」云々はすべて言い訳にすぎない。ノックをせずに退散したとはスティーブンスは明言はしていないが、おそらくそうしたはず。

私がしばらくしてドアをノックしたかどうか、いまになっては定かではありません。立ち聞いてしまった会話の驚くべき内容から、ノックをせずにそのまま立ち去るのがよいと判断したかもしれません。大いにありうることです。いずれにせよ……。 （138頁）

盗み聞きをした内容が「驚くべき」ものであったことをおぼえているのであれば、ノックをしたかどうか良くはおぼえていないというのはおかしくはないか。「いずれにせよ」とごまかしているが、結局ノックはしなかったのである。

国際会議の真ただ中、スティーブンスの父親が亡くなる。執事としての職務を遂行するために自分は、持ち場を離れることなく冷静に立派に仕事をしたという印象をスティーブンスは読者に与えようとするが、実は相

当に動揺していたことが「他者の声」から分かる。まずミス・ケントンがステーブンスの父親の具合がかなり悪いことを知らせたとき、ステーブンスは自分の言葉で「私が混乱しているように見えたに違いありませんまい」（150頁）と言うのだが、ここは原文では‘I must have looked a little confused’であり、「少しばかり」とこともなげに言っている。しかし、「少し」どころではなかったことが、彼がミス・ケントンにする煮え切らない返事から分かる。持ち場を離れるべきか、父親に会いに行くべきか相当に迷った挙句、ステーブンスはミス・ケントンに促されて父親の様子を急いで見に行く。階下に戻ると会議は終わっており、来賓たちは歓談をすべく喫煙室に移動している。給仕をしていると、ダーリントン卿の友人カーディナル卿の息子レジナルドから、「《気分が悪いのかい？》」, 「《ほんとうに大丈夫かい？》」, 「《気分が悪いんじゃないのかい？》」（152頁）と三度も言われ、ダーリントン卿からも「《ステーブンス、どうした？大丈夫か？》」, 「《なんだか、泣いているように見えたぞ》」（152-53頁）と言われてしまう。ステーブンスは泣きながら給仕仕事をしていたのであり、動揺している様子はダーリントン卿の目に留まるほどなのであった。自分が動揺していることを自分の言葉では言わずに「他者の声」に言わせるというのは、ステーブンスの語りに一貫した特徴である。それは単なる癖ではなく、特定の効果を狙って語り手ステーブンスが使っている語りの技法である。立派な館の執事に相応しい品格を自分がする物語の文体上においても保つことにこだわっているからでもあるが、狙われている効果は、能弁な自分じしんの語り口の外部にある他の登場人物たちの直接の声に自分の心理状態を指摘させることで、読者にこっそりと伝えはしながら良くは記憶に残らないようにすることである。国際会議は「私の執事人生の転機」となった大事な機会なのだったという印象をステーブンスは読者に押しつけたい。泣きながらでは職務に支障をきたしたことであろうが、そ

のことを読者にあまりしっかりと記憶されてしまっは、都合が悪いのである。

注

- 1) 英語原題は *The Remains of the Day*. 本稿執筆にあたり使用した原書は Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*, Faber and Faber, 2005. 以下、原典から英語表現を直に引用するときには、この版を使用する。
- 2) 歴史、当時の政治状況、あるいは価値観の変遷などをめぐってのこれまでの批評については、Matthew Beedhamの *The Novels of Kazuo Ishiguro*, 「ポストコロニアリズム」の章（61-83頁）で概観できる（Matthew Beedham, *The Novels of Kazuo Ishiguro*, Palgrave Macmillan, 2010）。
- 3) David Jamesによれば、『日の名残り』の完成度の高さは、ステイーブンスの語りにイシグロが施す技法が可能にするものであるとまずは言うべきだが、しかし同時にそれらの技法はみずからの技巧性を巧みに隠す（‘self-effacing’）というより高度な技法に裏打ちされている（David James, ‘Artifice and Absorption: The Modesty of *The Remains of the Day*,’ eds. Sean Matthews, Sebastian Groes, *Kazuo Ishiguro*, Continuum, 2010, p. 55）。イシグロじしんが自分も弾くギターの演奏についてしてきている主張がたとえとして引き合いに出されているのには、説得力がある。高度な技法をひけらかすだけの演奏は美しい音楽を奏するとは言えない。美しい音楽においては、駆使されている高度な演奏技術は隠されなければならないという趣旨の主張である。
- 4) 原典 *The Remains of the Day* からの引用には、以下すべて、カズオ・イシグロ、土屋政雄訳『日の名残り』早川書房、2001年を使用することとする。付する頁数も同版に準じる。
- 5) Andrew Teversonは、ステイーブンスがこの書物を読んでいたのは、ミス・ケントンが結婚をして住むことになったコーンウォール周辺の風景を見たいという動機からであったと指摘している（Andrew Teverson, ‘Acts of Reading in Kazuo Ishiguro’s *The Remains of the Day*,’ *Q/W/E/R/T/Y*, 9, 1999, p. 251）。

